



魔法

私は、78歳で前立腺がんを告げられた。しかし、年齢が高く手術はできないという。がん治療の方法が確立しているとは聞いていないし、死が身近に迫ったと思った。放射線治療のために入院したが気持ちは晴れなかった。

私の隣のベッドに、小学3年生くらいの男の子が入院してきた。親から離れて入院したのだから何かあるのだろう。私はその子が気になって仕方なかった。看護師さんが何度も見に来て、お世話をしているが、四六時中付いているわけではない。私は様子を見てそれとなく声を掛けるようにした。

親御さんが男の子のところに来るときは、いつも3・4歳くらいの女の子が付いてきた。妹らしいその子が4つか5つ年上のお兄ちゃんを「けんた、けんた」と呼び捨てにする。親のまね

だが、それも気になっていた。

お母さんに女の子の名前を聞くと「とうこです。東に子と書きます」と言う。

「東子ちゃん。私はね、あなたがすてきな人になる魔法を知っています。魔法は嫌ですか」。東子ちゃんがげげんな顔でお母さんを見た。

「そりゃー、不安だよ。なんたって魔法なんだから。東子ちゃんはお兄ちゃんのことを『けんた』って言うてるでしょう。大きくなったら、その言い方が変だと思うようになります。でも、習慣になったものは簡単に直せません。だから今から『けんちゃん』と言うようにするの。それが魔法の中身です」お母さんが賛成し、東子ちゃんも納得した。

1週間ほど後のこと。私がトイレに入っていると、洗面所で女の人の話し

声がした。

「けんたの隣の方は何をしていた人ですか」

「小学校の先生だったようです。実はあの方、病気で落ち込んでいたので、元気になってほしくて隣のベッドをけんたくんにしたのです。おかげで元気になってくれました」

そうだったのか、魔法は私がかけたのではなく私がかけていたのだ。

〈北海道〉
福士 ふくし 勝久 かつひさ
83歳

